

## 平成 29 年度 全国高校生意識調査報告

全国公民科・社会科教育研究会（全公社研）の前身となる研究会の一つである、全国高等学校倫理・現代社会研究会（全倫研）では、昭和 62 年度以来、2～3 年おきに「全国高校生意識調査」を実施していました。しかし、研究会の統合もあって、平成 13 年度に実施され 15 年度に「全公社研紀要」第一号に結果が報告されたのを最後に、調査の実施は途絶えておりました。

この調査の目的は、「移り変わりの激しい社会の中で生きる高校生に、よりふさわしい公民科教育を行うための基礎資料とする」（平成 10 年度報告書）と記されていました。最終実施以来 15 年が経過し、社会情勢は当然大きく変化しました。この間、かつての調査に参画した会員も少なくなりました。しかし、調査のノウハウを受け継ぎながら、本来の趣旨に立ち返って同様の調査ができないか、検討を繰り返し、ようやくそのための準備が整いました。

折しも、平成 30 年度は、高等学校の新しい学習指導要領が公示されました。高等学校公民科においては、必修科目「公共」が新設され、そこでは「公共空間に主体的に生き他者と協働するための資質・能力の育成」が求められています。選択科目「倫理」「政治・経済」においても、原典資料や対話的方法（「倫理」）、合意形成や討論・ディベート（「政治・経済」）が学習活動の例として示されるなど、思索を深めたり社会形成に向かったりする科目としての授業の工夫が求められています。

わたしたちは、現行の学習指導要領のもとで行ってきたさまざまな教育方法・内容の実践的な研究を総括しながら、新しい学習指導要領において期待される授業の開発に向けて、そのための基礎資料として活用できることを目指して、この調査を実施することにしました。

平成 13 年度以来の実施となる本調査の作成に当たっては、特に以下の点に配慮しました。

（1）平成 10 年度、13 年度には、「ローゼンバーグの自己評価尺度」に加えて新たに「行動を決定する判断基準」および「自他の関係についての傾向」について、説明尺度としての有効性を確認しました。今回も、この 3 つの基準を用いることで、高校生の生活意識とその変化を多角的に分析し、学校生活や授業における対応について考察するうえで参考になるようにしました。

（2）高校生の生活意識を明らかにするための設問については、社会状況の変化に合わせてすべて再吟味の上、改廃ならびに新設をしました。その際、近年行われた各種機関や自治体、民間等の様々な先行調査を参照し、割愛してもよいもの、重複していても説明尺度とのクロス集計等で新たな知見が期待できるもの、本調査でユニークなものを選び出しました。

（3）公民科授業の方法や内容については、本調査の特徴でもあり、回答方法も含めてより詳細な分析ができるように設問を工夫しました。特に教育方法については、近年の研究を参考にして大きく組み直すことで、今後の授業改善に資するようにはしました。

以上の趣旨に沿って、全公社研を通じて依頼に応じていただいた 42 校、6018 名の有効回答が得られ、集計・分析を行いました。

## 第一部：三つの基準尺度から見た高校生の意識

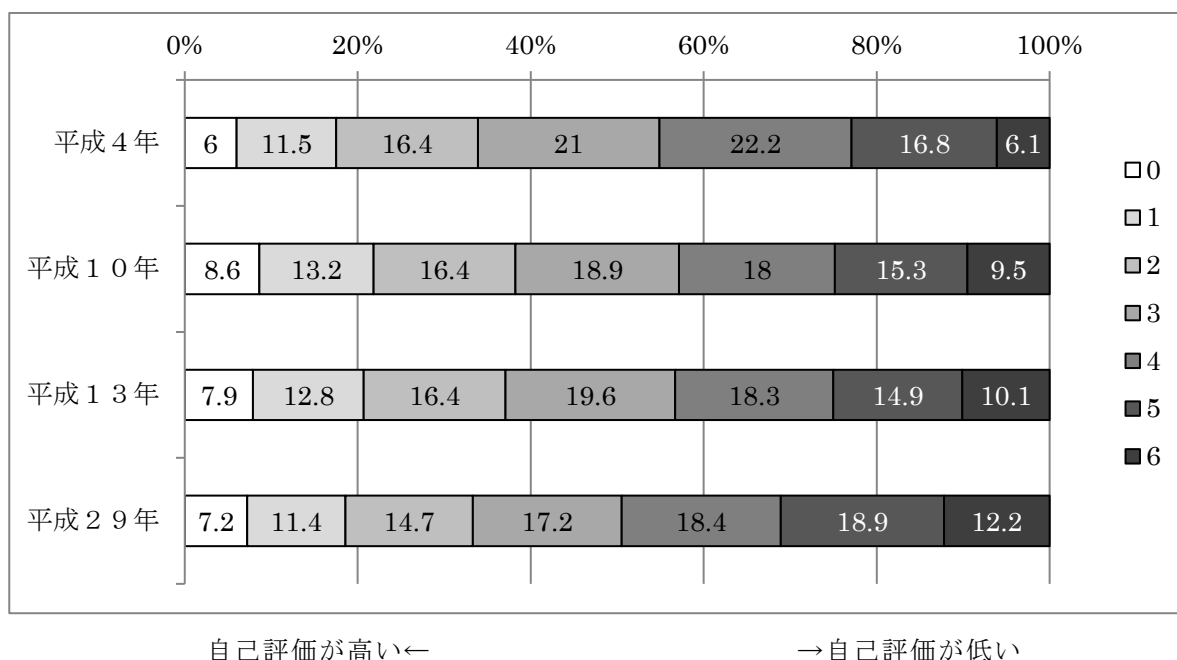
### (1) 自己評価尺度

「ローゼンバーグの自己評価尺度」は、10項目の質問に4件法で回答し、その結果から自己評価（self esteem）の高低を測定するものである（Q1～10、2,5,6,8,9は逆転項目）。

#### (1) 過去調査との比較

全倫研の調査では、独特の集計法により、0点から6点の7段階で評価してきた。今回も比較のため、同様の集計を行った結果が次のとおりである（図1）。点数が低いほど自己評価が高く、点数が高いほど自己評価が低いことに注意が必要である。

比較可能なデータが残る平成4年以来、自己評価の低いグループの割合は増えており、自己評価の高いグループの割合は横ばいかやや減少している。

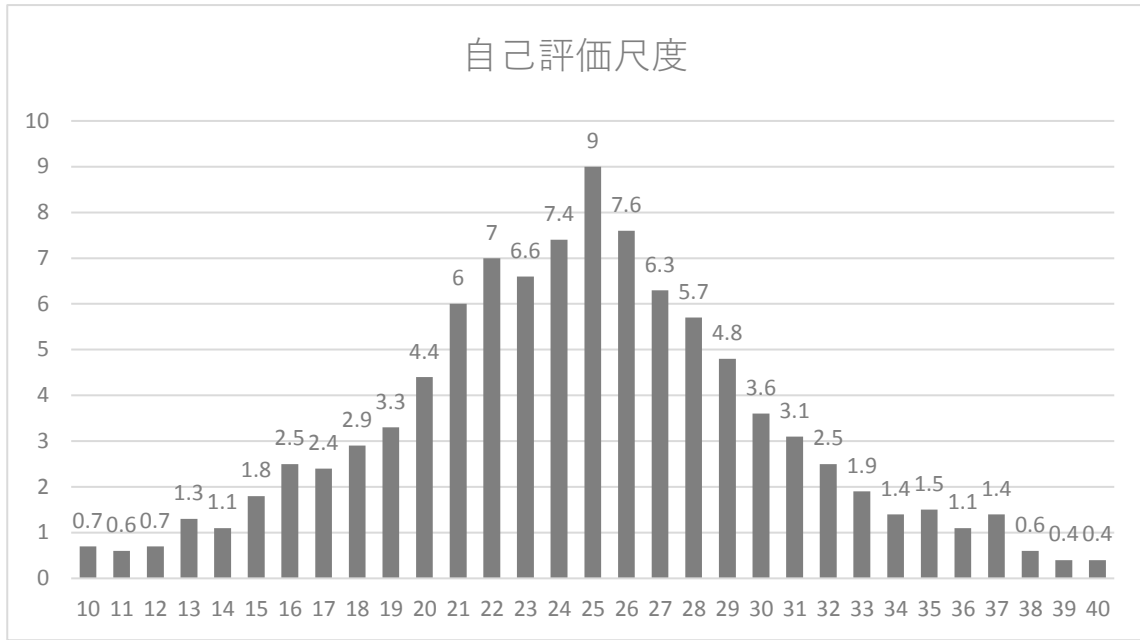


### (2) 自己評価尺度と高校生の意識

平成10年度調査以来、自己評価尺度の単純合計をもとにして、上位群と下位群で他の調査項目の回答にどのような違いがあるか、クロス集計を行って分析してきた。今回も同様の分析を実施した。

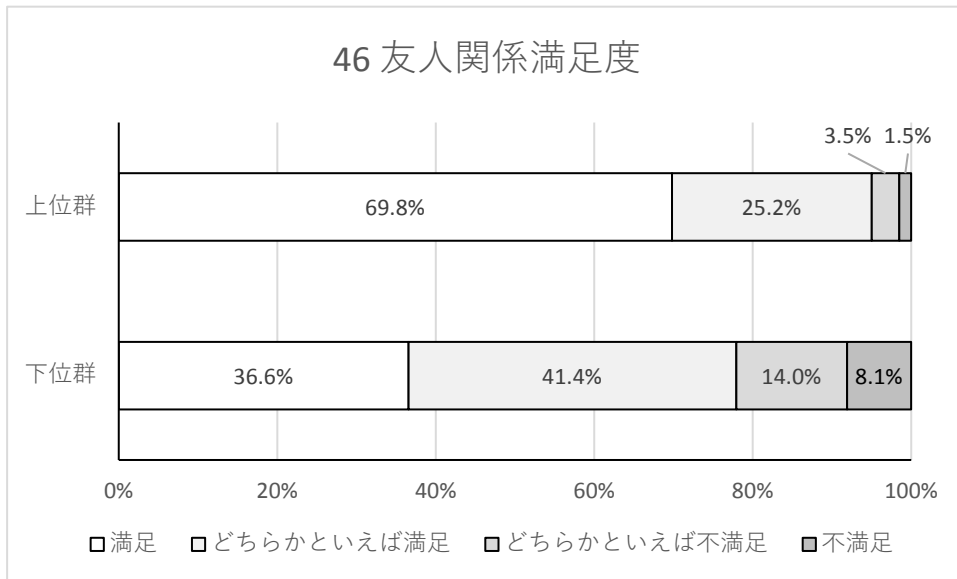
単純合計の分布は正規分布に近く、20ポイント以下が21.6%、29ポイント以上が22.6%となるので、これを上位群・下位群とした。

図は分布（値はパーセント）である。

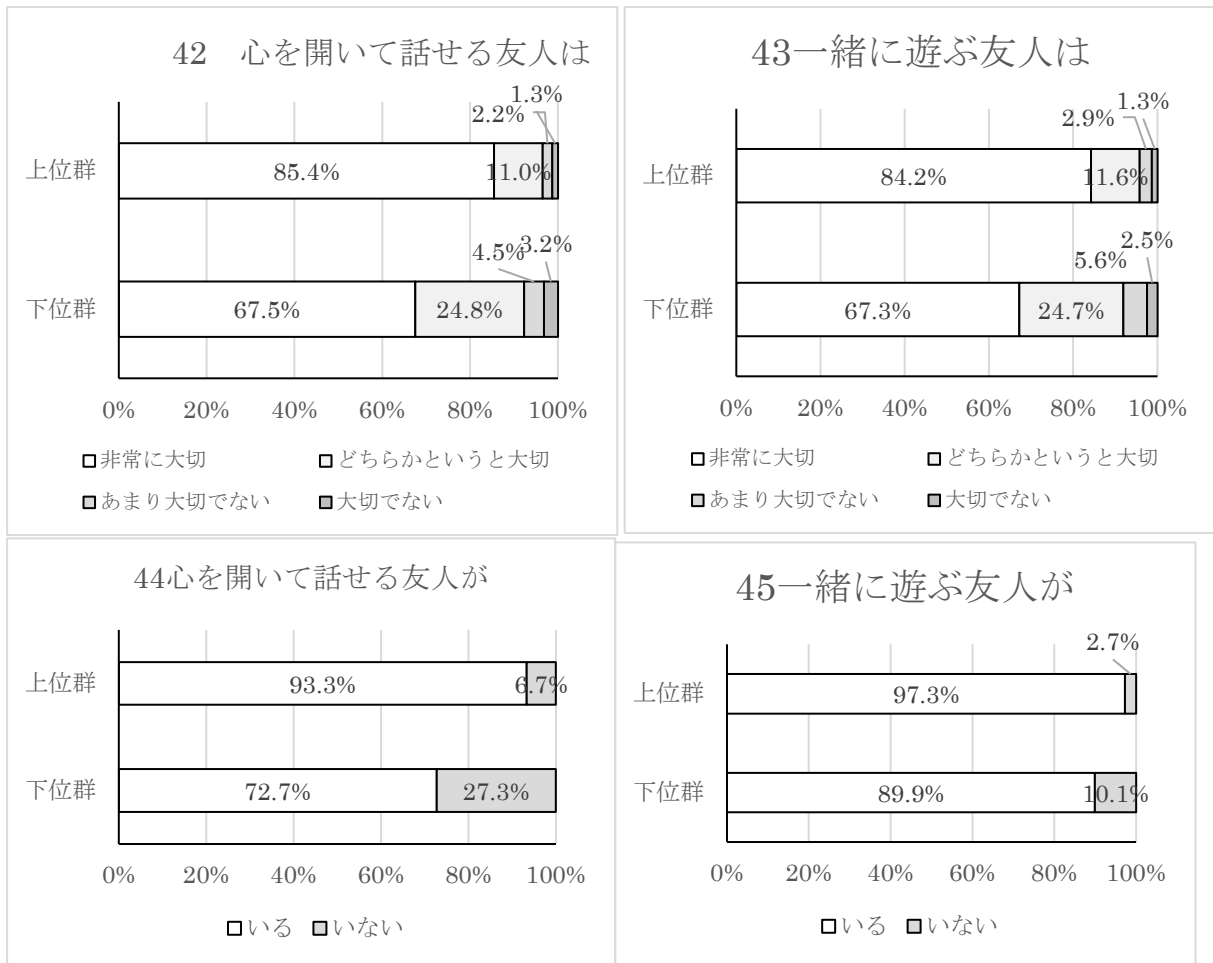


以下、主な意識調査項目とのクロス集計結果を示す。

ア) 友人関係



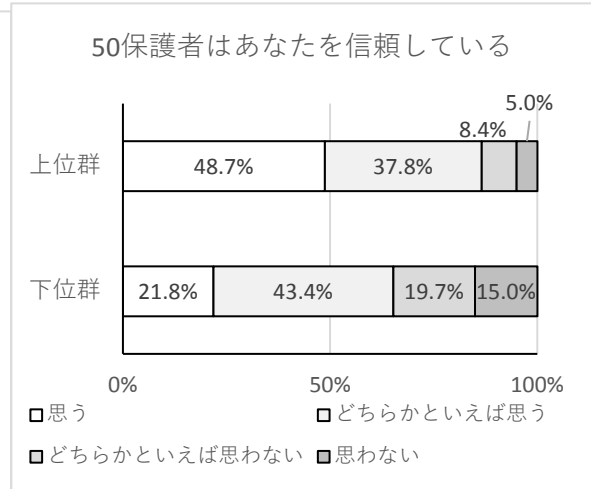
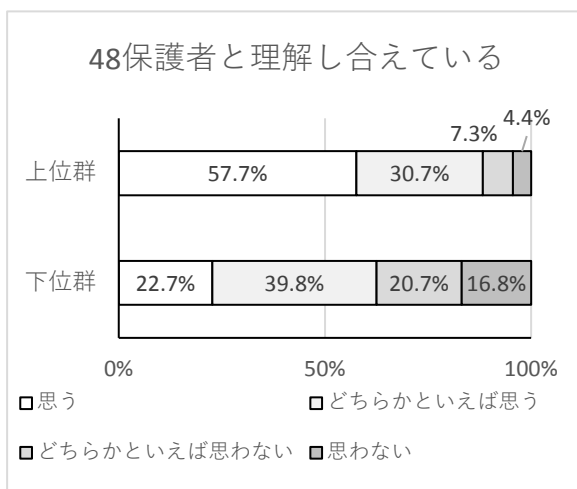
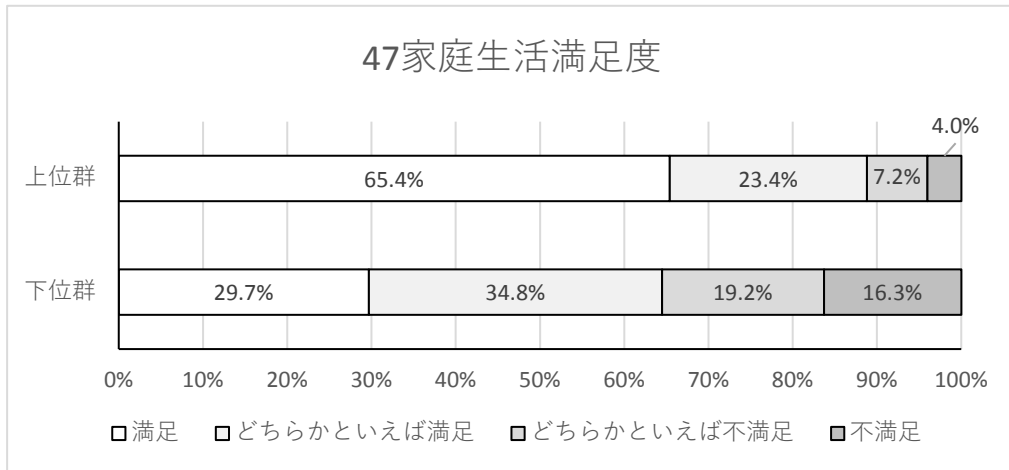
友人関係の満足度は、明らかに上位群で高く、下位群で低い。「満足」「どちらかといえば満足」を合わせると 95%であり、自己評価と友人関係満足度はきわめて関係が深いことが分かる。意識と実態としてはどうか。



「心を開いて話せる友人が大切」も「一緒に遊んだり楽しんだりする友人」も大切と考える割合は、いずれも上位群は8割以上、下位群は6割以上と差があるが、前者の友人が「いる」と答える割合は上位群9割以上で下位群7割以上、後者の友人が「いる」と答える割合は上位群9割以上で下位群9割弱と、差が大きいのは前者である。「心を開いて話せる友人」の存在が自己評価と深くかかわっていると考えられる。

#### イ) 家庭生活

家庭生活の満足度は、さらに大きく自己評価と関係する。「満足」という回答が上位群65.4%に対して下位群29.7%と、倍以上の開きがある。「どちらかといえば満足」を加えると、上位群は9割弱が満足、下位群は6割5分となる。保護者との理解や信頼も、肯定的な答えの割合は同様であり、この上位群9割、下位群6割5分という割合は、家庭生活についての不満が自己評価と深くかかわりあっていることを示していると思われる。

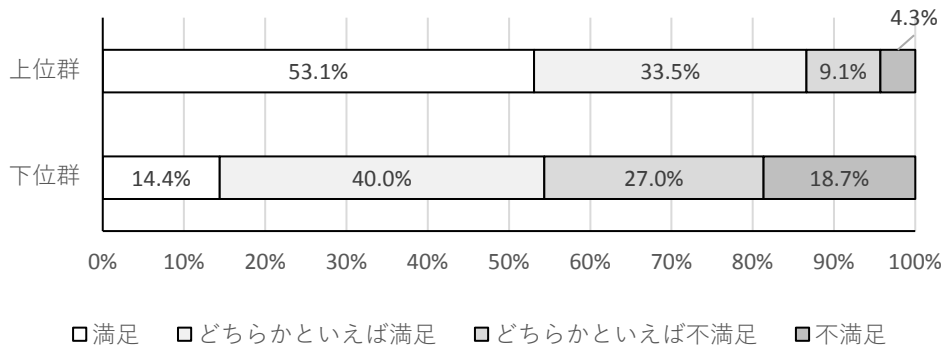


#### ウ) 学校生活

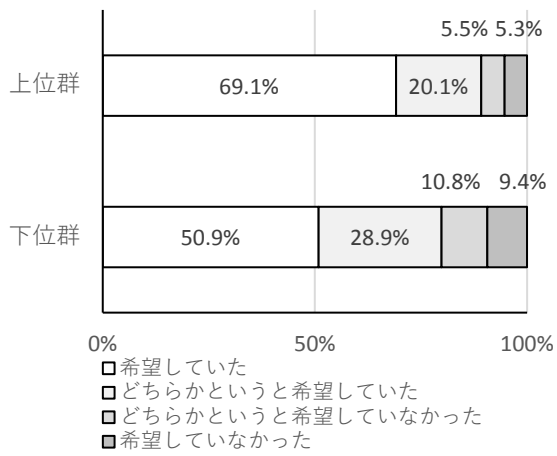
学校生活の満足度にも、かなり大きな差があり、**学校生活満足度と自己評価との相関は明らかである**。上位群の「満足」が53%以上は、下位群の「満足」「どちらかといえば満足」をあわせた54%にほぼ同じで、「どちらかといえば」をあわせると86%を超える。上位群で過半数の「満足」と答えた者が下位群では14%程度ということは、自己評価の低い者の不満足感がどこから生じているか耳を傾ける必要を示していると思われる。

希望していた学校か、授業についていけるか、クラブ活動や生徒会活動は大切か、などとの関係もあるが、特に下位群の3割以上が授業についていけないことは重く受け止めるべきであろう。

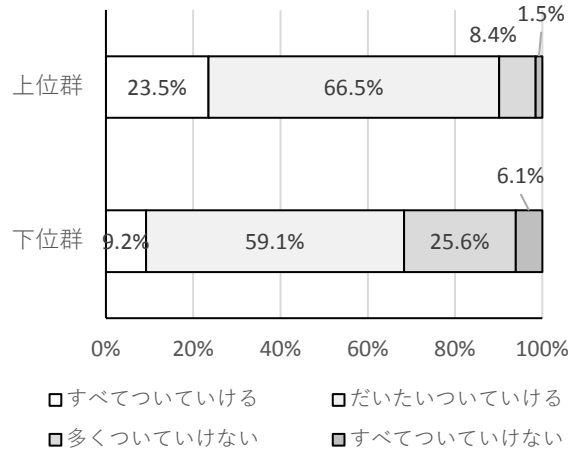
### 56学校生活満足度



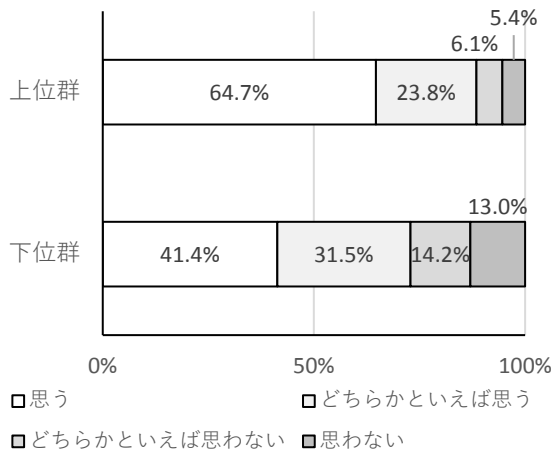
### 57入学を希望していた学校か



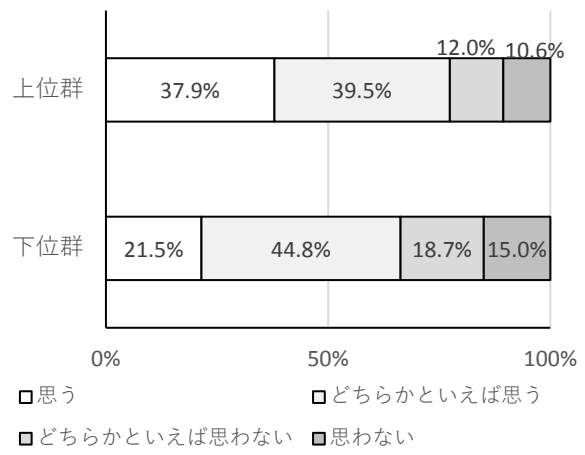
### 58学校の授業についていけるか



### 61クラブ・部活動は大切だと思うか

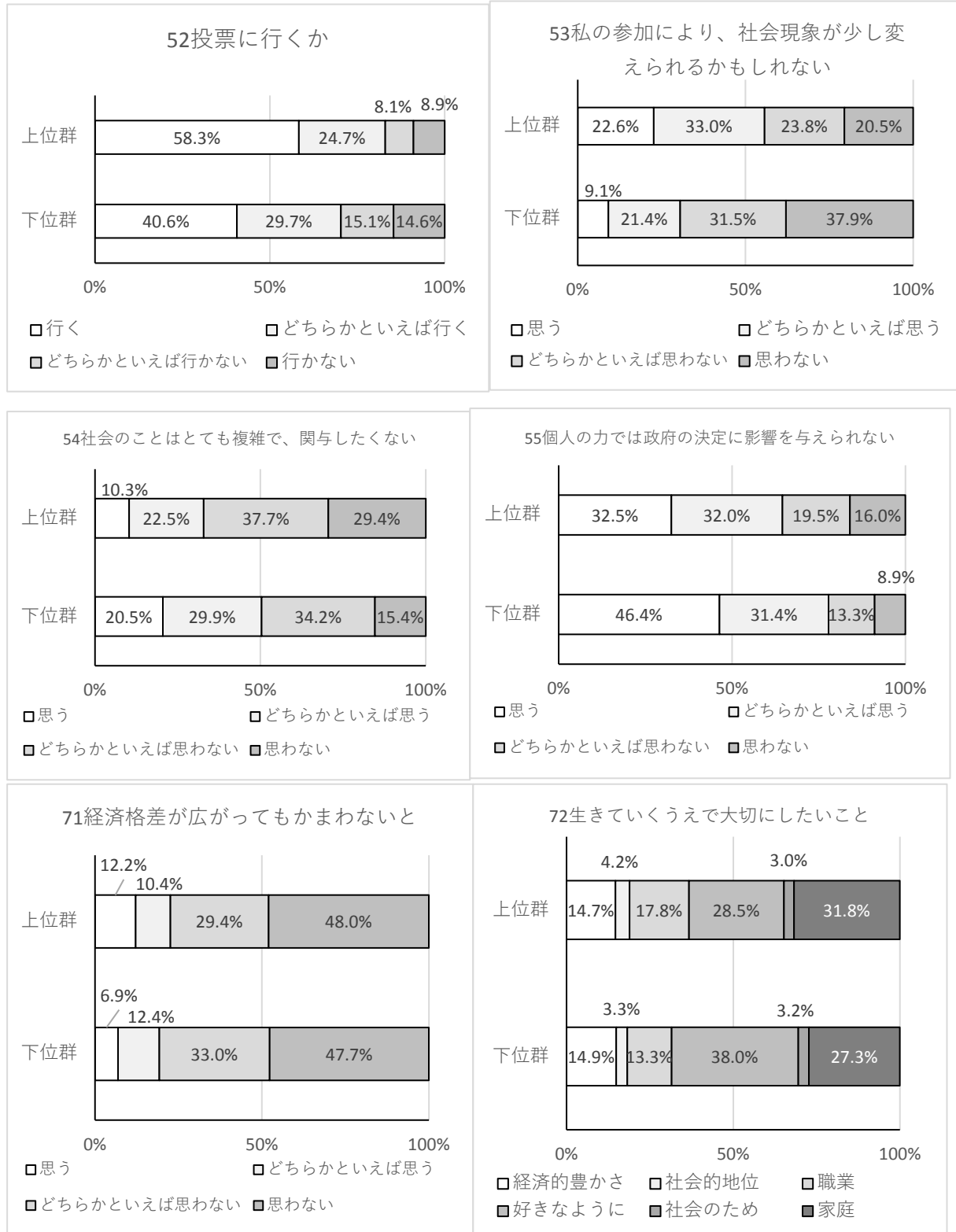


### 62生徒会・委員会活動は大切だと思うか



エ) 社会参加意識

ここでも大きな差がみられる。上位群は政治参加の意識が高く、自分の考えを政治に生かそうという意欲が見られる。ただし経済格差の広がりや生きていくうえで大切にしたいことに関しては、特に目立った差はない。



### (3) 3つの基準尺度の独立性について

ローゼンバーグの自己評価尺度と、独自尺度の二つについて、相関は以下のとおりである。  
 相関

		自己評価	行動決定の基準	自他関係の傾向
自己評価	Pearson の相関係数	1	-.021	.206**
	有意確率 (両側)		.102	.000
	度数	5966	5960	5938
行動決定の基準	Pearson の相関係数	-.021	1	.331**
	有意確率 (両側)	.102		.000
	度数	5960	6011	5983
自他関係の傾向	Pearson の相関係数	.206**	.331**	1
	有意確率 (両側)	.000	.000	
	度数	5938	5983	5990

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

度数が大きいのので確率は有意であるが、相関係数に注目すれば、「自己評価」と「自他関係の傾向」の間には.206の、「行動決定の基準」と「自他関係の傾向」の間には.331の「弱い相関」がある。この程度であれば、おおむね独立した基準尺度として用いても良いであろう。

また「自己評価」と「行動決定の基準」はほぼ無相関である。

### (4) 「行動決定の基準：道徳原理と快楽原理」尺度 (設問 11～15) と生活意識

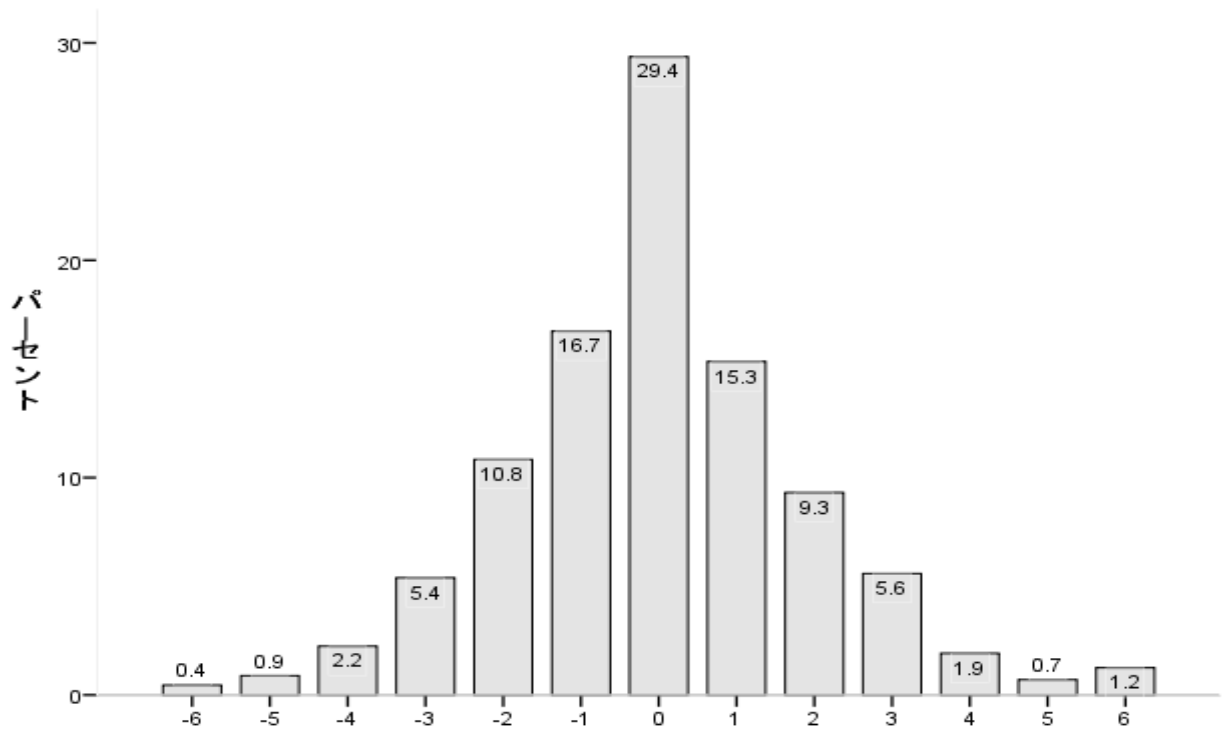
設問 11～15は、「行動決定の基準」尺度として、平成 10 年度調査から使われたものである。因子分析の結果から、「快楽原則」と「道徳原則」という 2 因子が抽出され、平成 13 年度調査でも同様の結果が得られた。

今回の調査でも、今までの調査で中立と見てきた設問 14 にやや偏りが見えてきたものの、従来通りの分析に特に支障はないと考えられるので、設問 11 と 12 の合計と、13 と 15 の合計との差を準尺度として分析に用いた。

行動決定の基準(設問 11～15) 因子分析	I	II
12. 他人や世の中の役に立つか立たないか	<b>0.800</b>	-0.124
11. 正しいか正しくないか	<b>0.782</b>	0.019
14. 人によく思われるか悪く思われるか	0.591	0.339
15. 自分の利益になるかならないか	0.079	<b>0.835</b>
13. 自分にとって面白い面白くないか	-0.025	<b>0.823</b>

(主成分分析・固有値 1 以上・バリマックス回転)

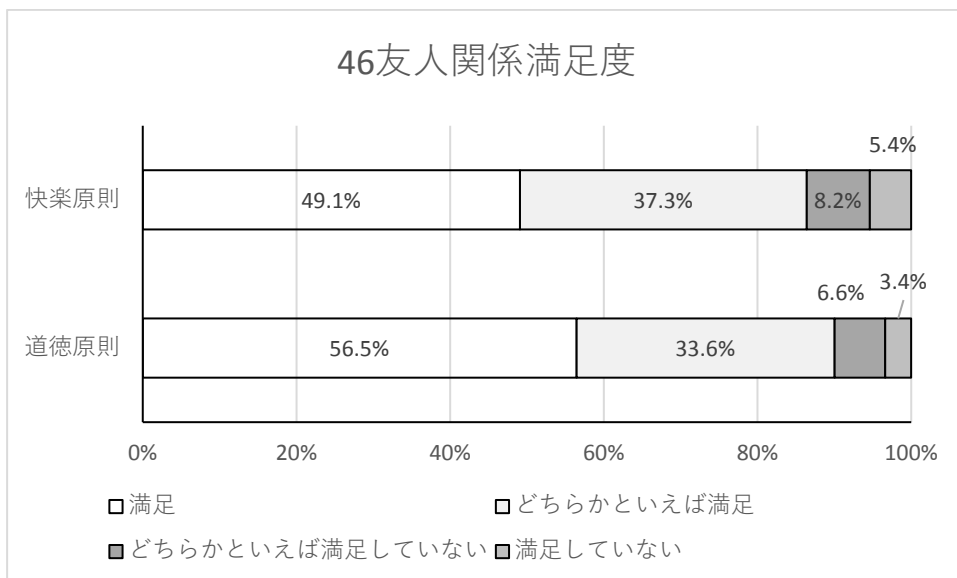


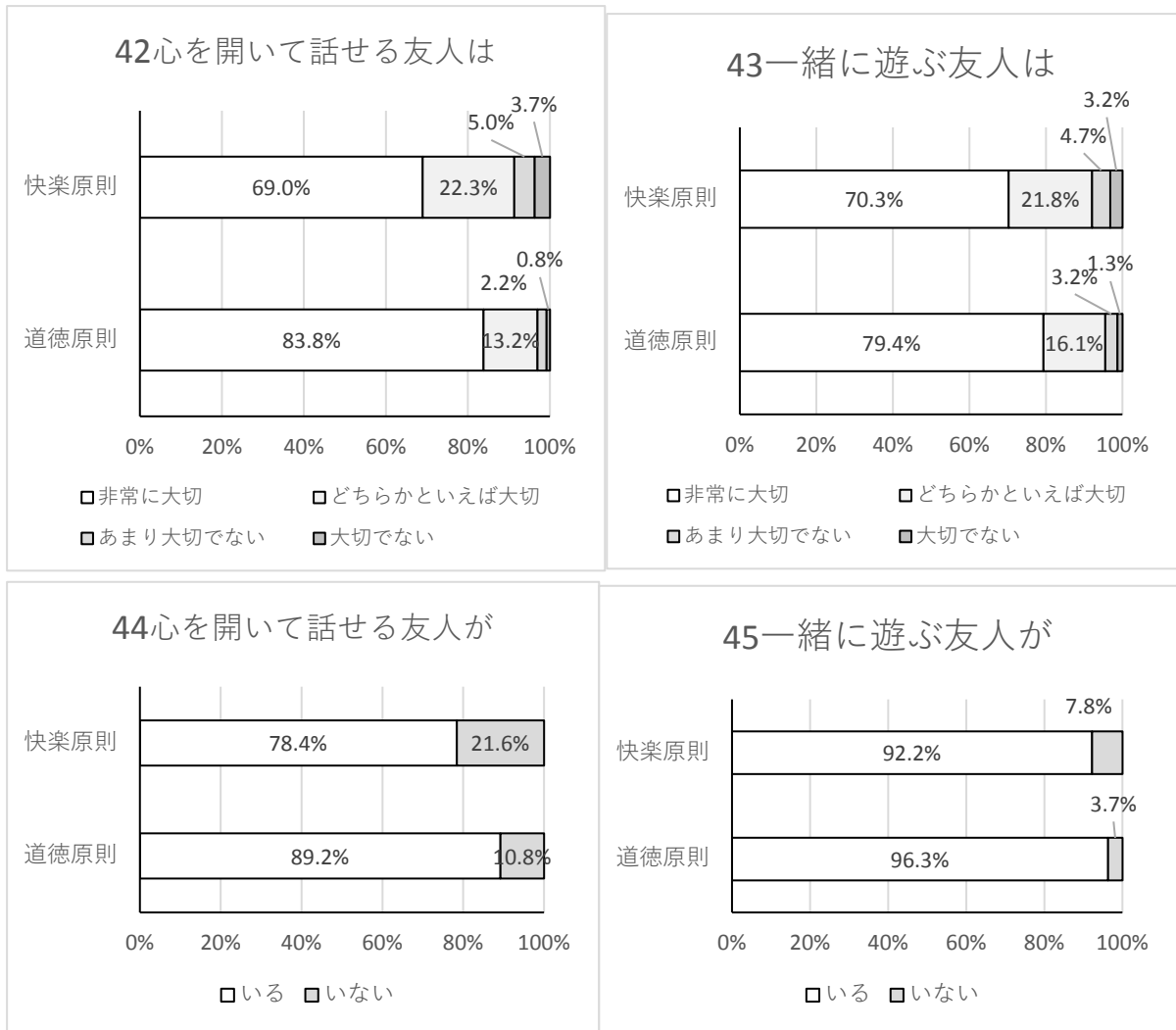


各項目の最大値が4点、最小値が1なので、値は+6～-6の間になる。  
 -2以下の者（19.8%、1190人）と2以上の者（18.8%、1128人）を、「快樂原則」群と「道徳原則」群として、分析を行った。

ア) 友人関係

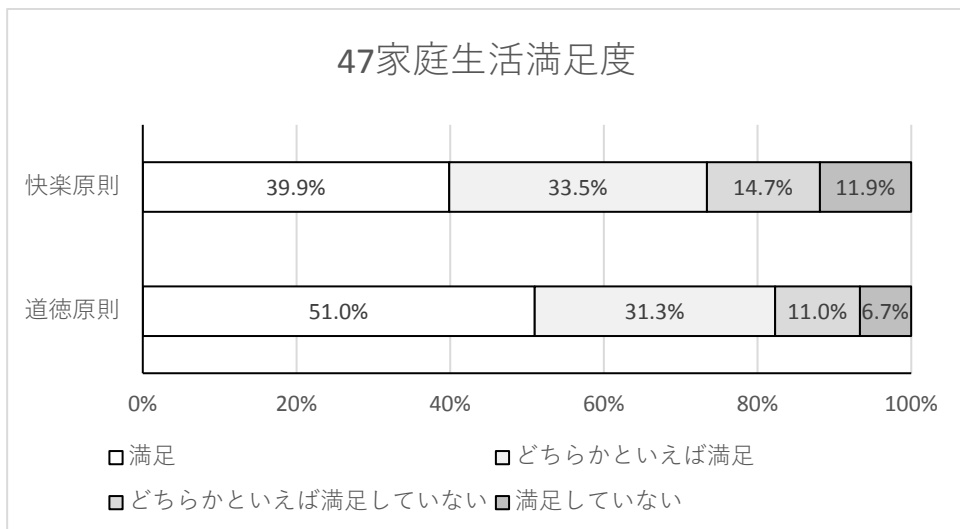
友人関係の満足度は、道徳原則タイプがやや満足度が高い。友人の大切さや、実際にいるかどうか、道徳原則タイプがいずれも上回る。

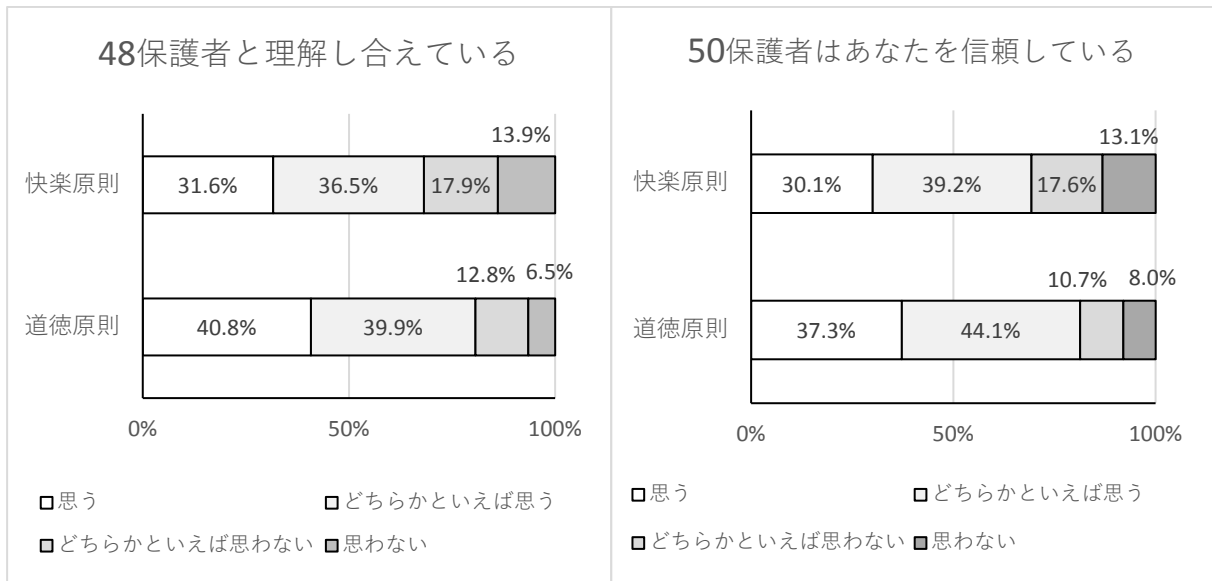




イ) 家庭生活

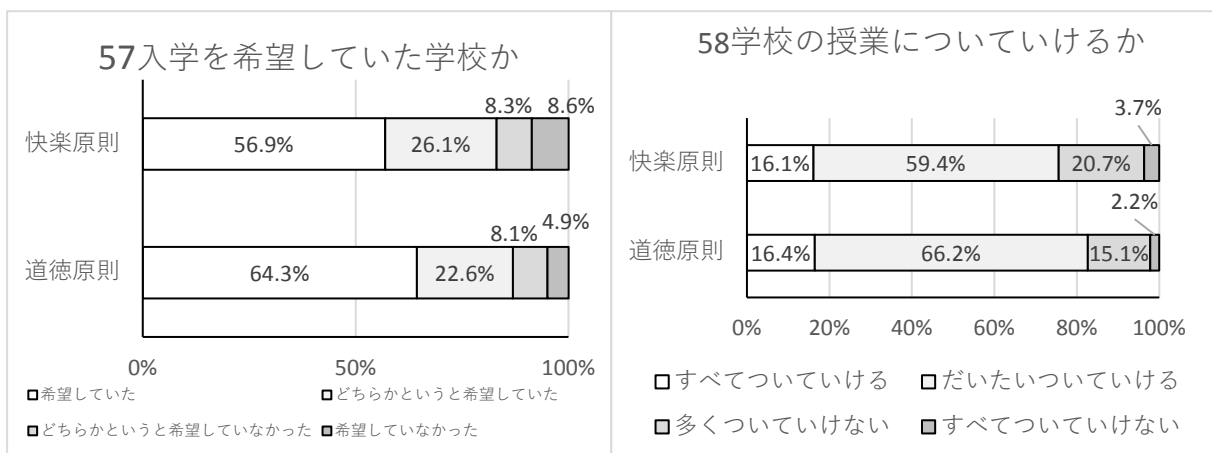
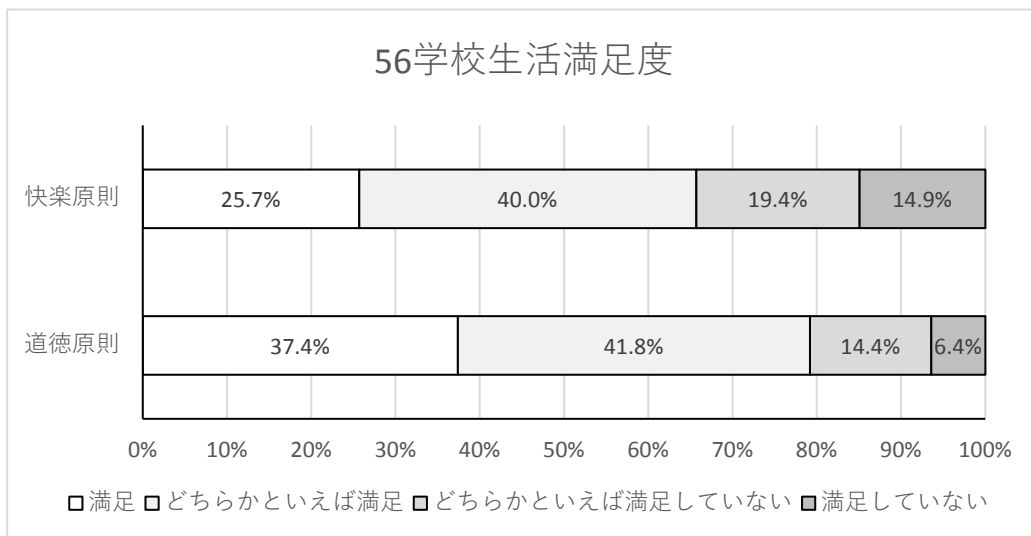
家庭生活満足度は、道德原則タイプの方がやや高い傾向がある。保護者と理解し合っているか、信頼されているか、についても同様の傾向がある。



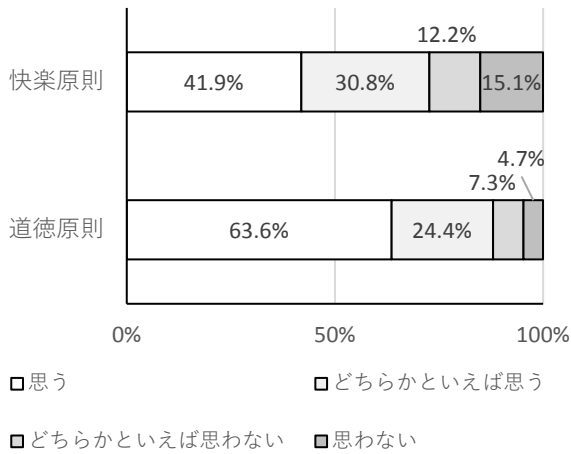


ウ) 学校生活

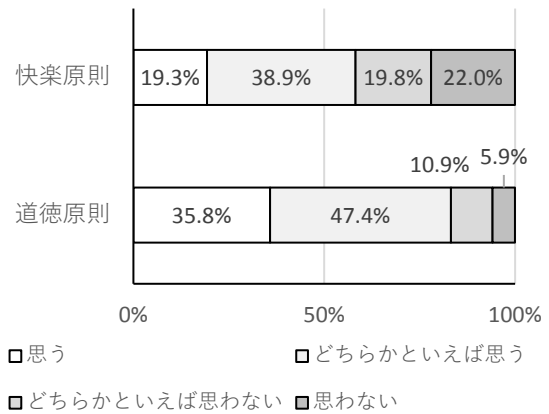
学校生活満足度も、道德原則タイプのほうが、やや高い傾向がある。希望入学や授業への理解度なども、やや高い。それに比べて、クラブ・部活動や生徒会委員会を大切とする考え方は、道德原則タイプはかなり強い。



61 クラブ活動・部活動は大切だと思うか



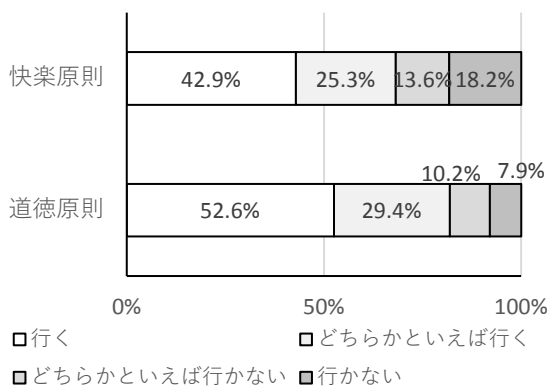
62 生徒会や委員会活動は大切だと思うか



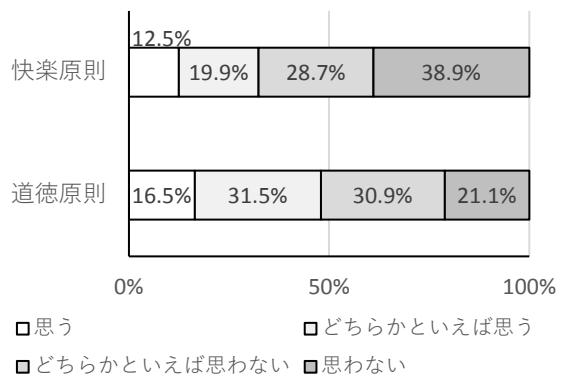
エ) 社会参加意識

投票を始め、社会参加への積極的な意識は道德原則タイプが強い。経済格差の広がりが良いとは思わない、生きていくうえで大切なことで仕事や家庭を挙げる割合も大きい。自己評価尺度とは違った特徴が現れているといえる。

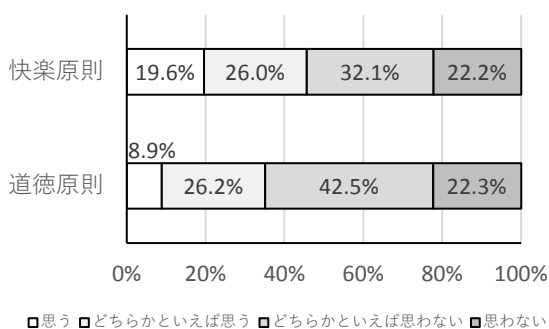
52 投票に行くか



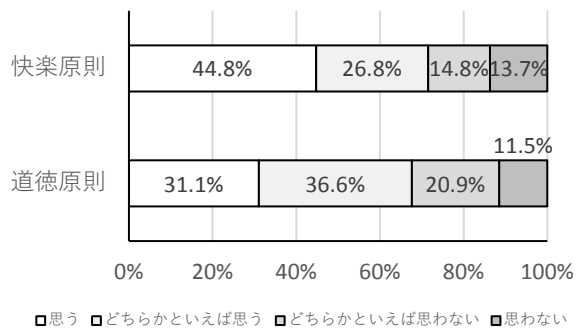
53 私の参加により、社会現象が変えられるかも知れない

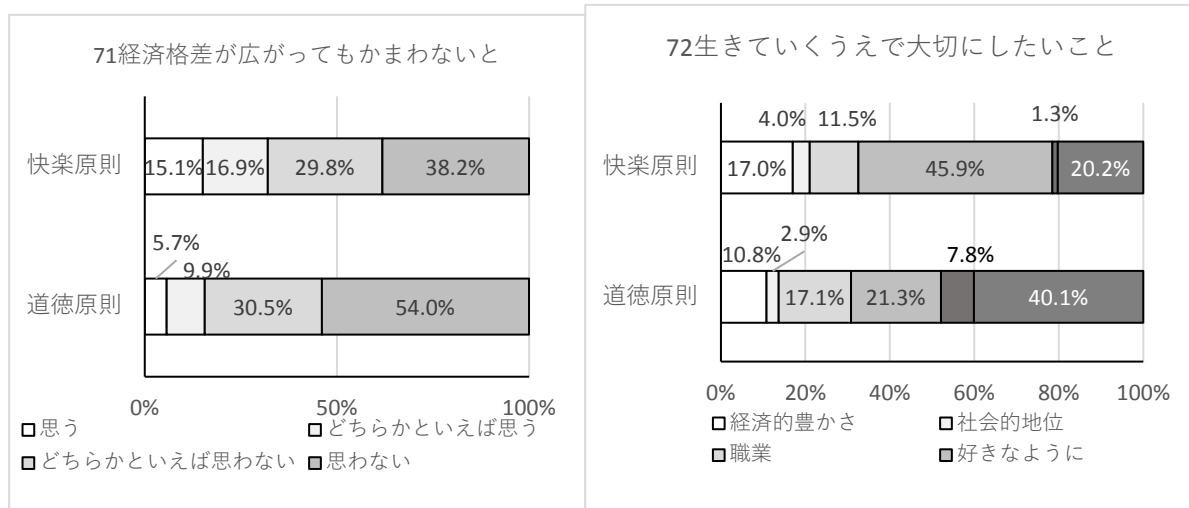


54 社会のことはとても複雑で、関与したくない



55 私個人の力では政府の決定に影響を与えられない





### (5) 「自他関係の傾向：自律と我儘（わがまま）」尺度（設問16～23）と生活意識

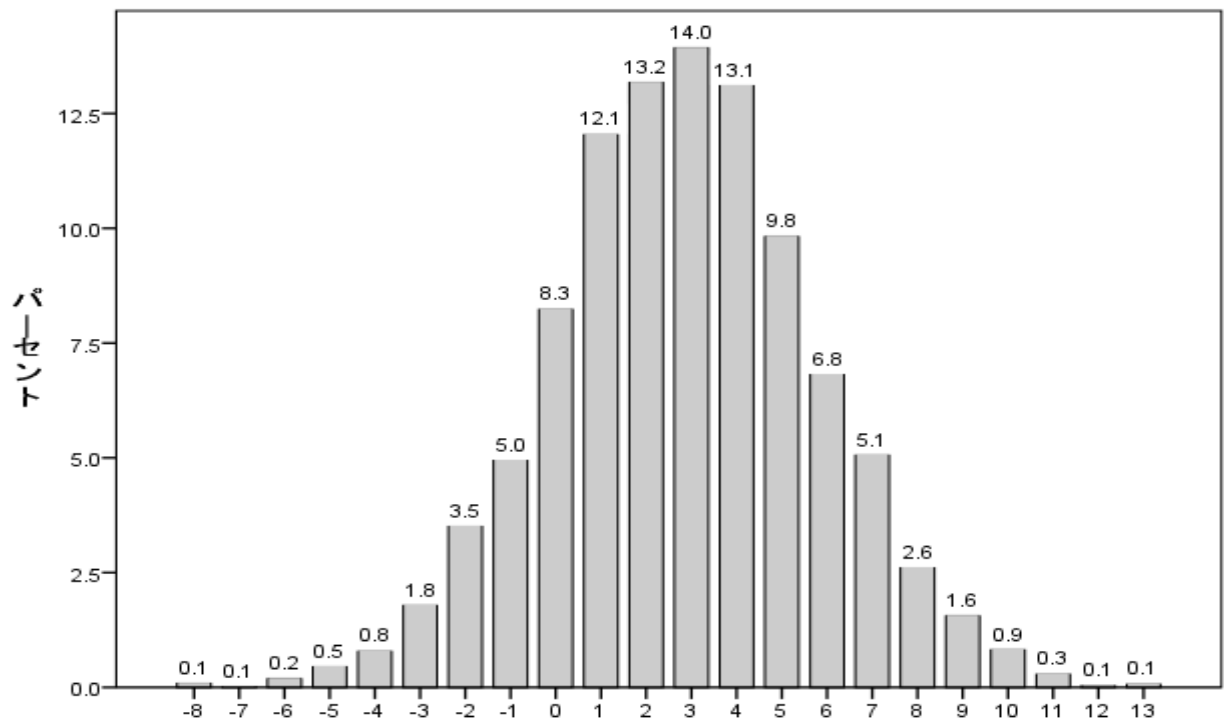
設問16～23は、「自他関係の傾向」尺度として、やはり平成10年・13年調査で用い、因子構造も共通と考えられたものである。

一見、これらの設問の文は似たような傾向があるように見えるが、過去の分析でも同様の因子構造が見られたように、「わがまま」群は他者との関係を嫌う傾向がある。いっぽう、「自律」群は積極的な自己決定を志向している。因子構造を見れば大変はっきりと、この二つのグループは違うのである。

なお今回調査では、主成分分析の固有値1以上で抽出すると因子数が2個になるが、因子数3を指定すると、同様の因子構造が現れてきた。第三因子の固有値は主成分分析の段階でも0.9以上はあるので、今回の調査でも前回と同様の「自律」と「わがまま」で基準尺度として用いても良いと判断した。

自他関係の傾向（設問16～23）	因子分析		
	I	II	III
22. 他人のために時間を取られたくない	<b>0.694</b>	0.131	0.052
18. 自分一人が努力しても、世の中は良くなる	<b>0.595</b>	-0.150	0.202
20. ボランティア活動や奉仕活動をしたい	<b>-0.582</b>	0.281	0.378
16. 働く事や勉強する事は最低限にして、自由な生活を楽しみたい	<b>0.561</b>	0.078	0.085
21. いつでも自分の気持ちに素直に行動すべきだ	-0.009	<b>0.783</b>	-0.012
23. 自分で納得のいかないことは、絶対にしない	0.406	<b>0.631</b>	-0.107
19. 何事も、自分でやってみないとわからない	-0.255	<b>0.613</b>	0.300
17. 人と付き合うときは、お互いにプライバシーを侵さないようにしたい	0.248	0.018	<b>0.868</b>

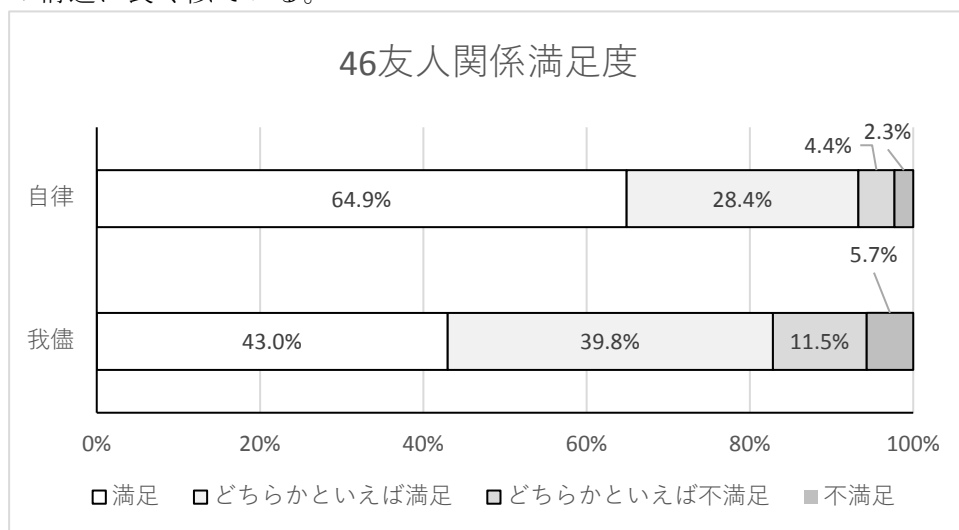
(主成分分析・因子数3・バリマックス回転)

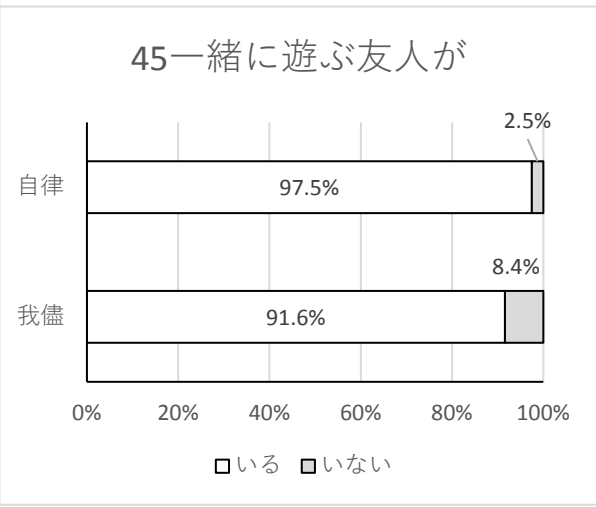
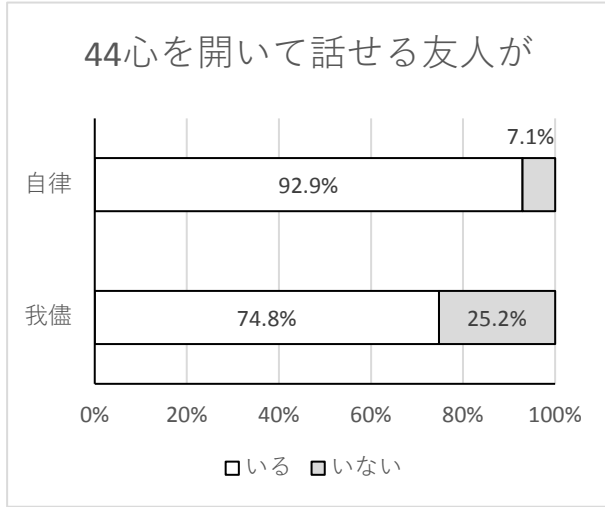
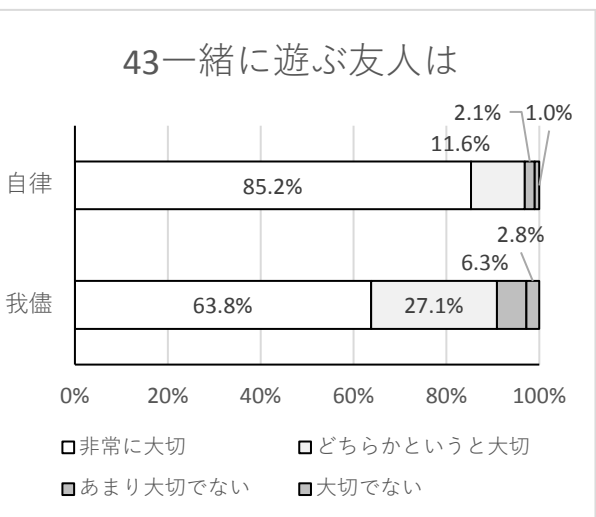
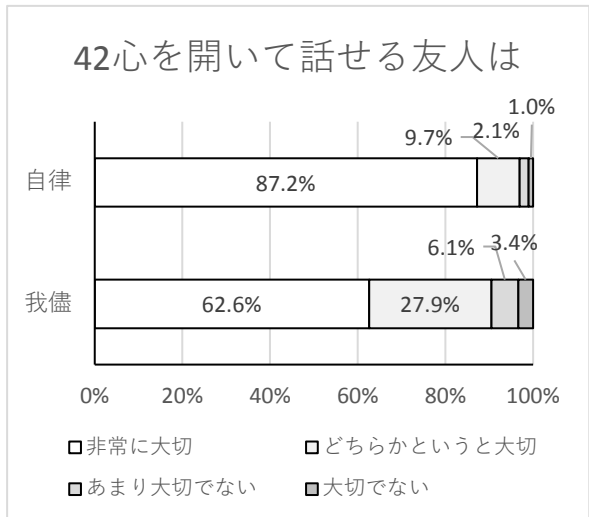


やや偏りはあるものの、分布を見てスコアの差0以下（20.3%、1215人）を「わがまま」群、6以上（17.5%、1048人）を「自律」群として、分析を行った。

ア) 友人関係

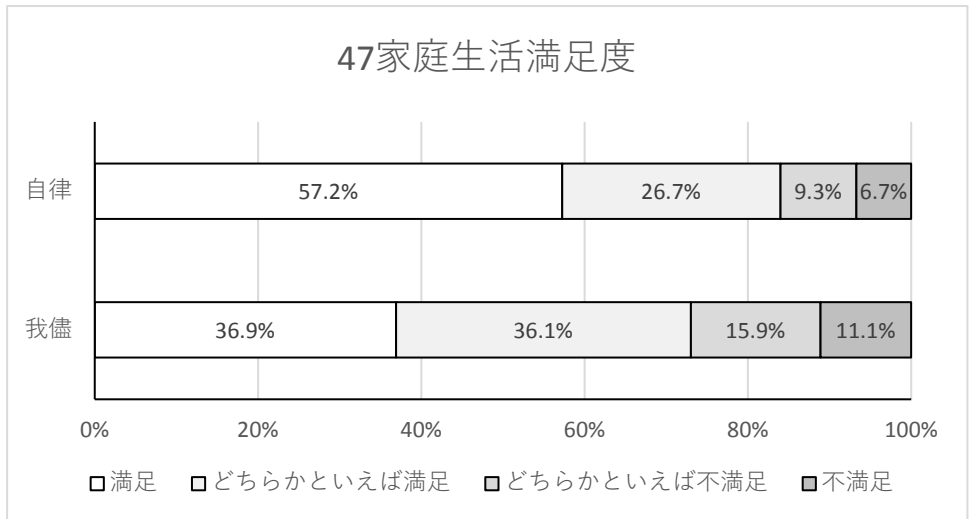
「満足」では自律群65%、わがまま群43%と、明らかに自律群に高くわがまま群に低いという差が見られる。友人の大切さや実際にいるかいないかについても、自律群で心を開いて話せる友人がいるという答えが多いなどの差も、自己評価尺度の上位群・下位群の差の構造に良く似ている。

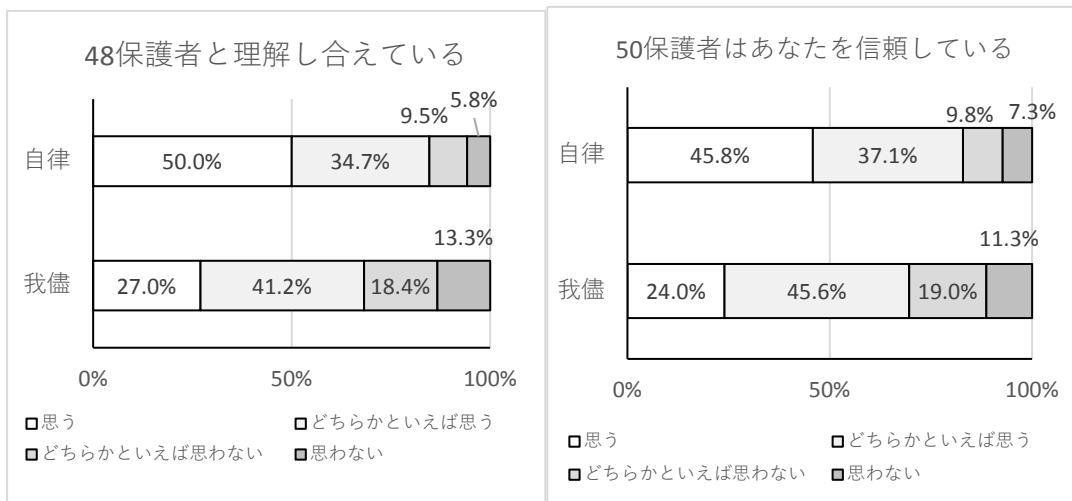




イ) 家庭生活

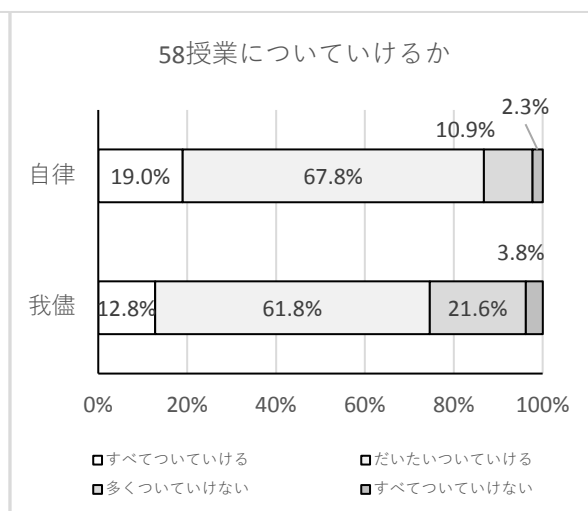
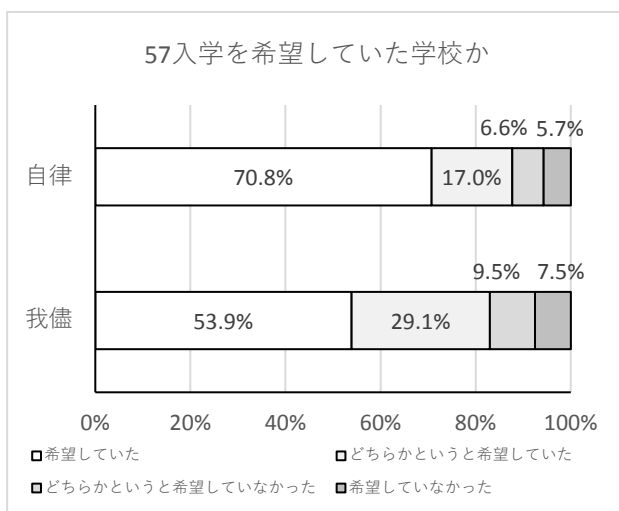
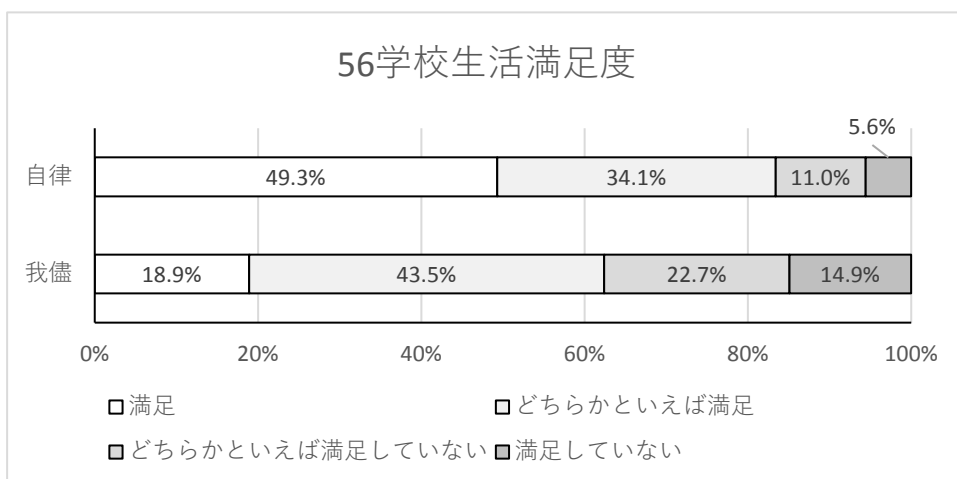
家庭生活満足度も、自律群が高い傾向にある。保護者からの理解や信頼についても同様の傾向が見られる。



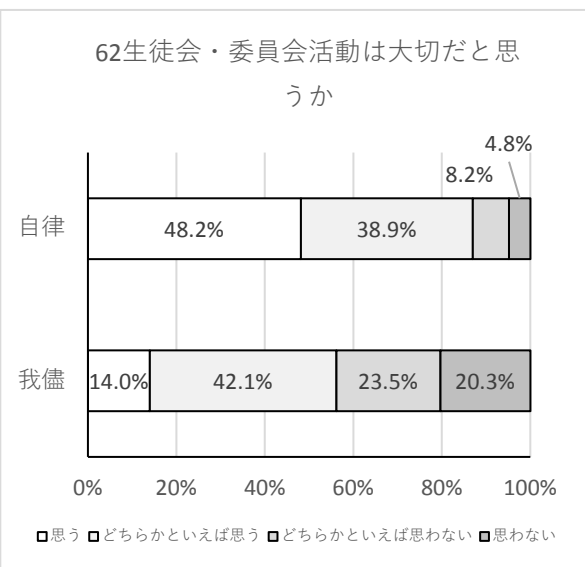
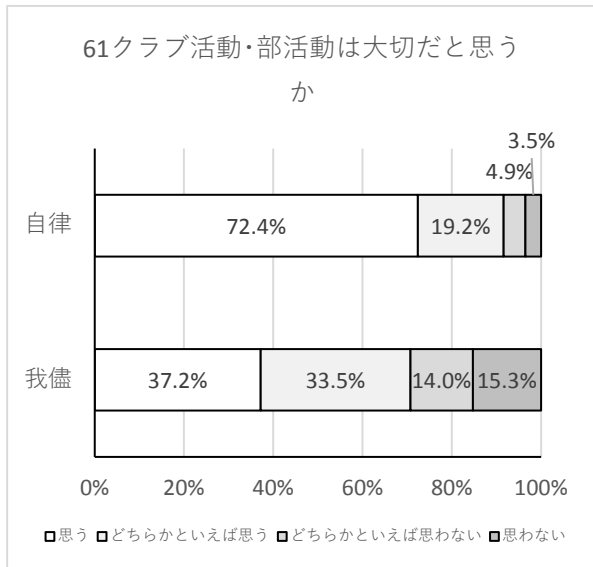


ウ) 学校生活

これも自律群とわがまま群で明かな差が現れている。興味深いのは、「クラブ活動・部活動の大切さ」および「生徒会活動・委員会活動の大切さ」の差の開きで、これらは自己評価上位・下位群の差よりもさらに大きい。自律群はじっさいに学校生活でこれらの活動に従事参画し、手ごたえや充実感を得ていることも多いと思われる。

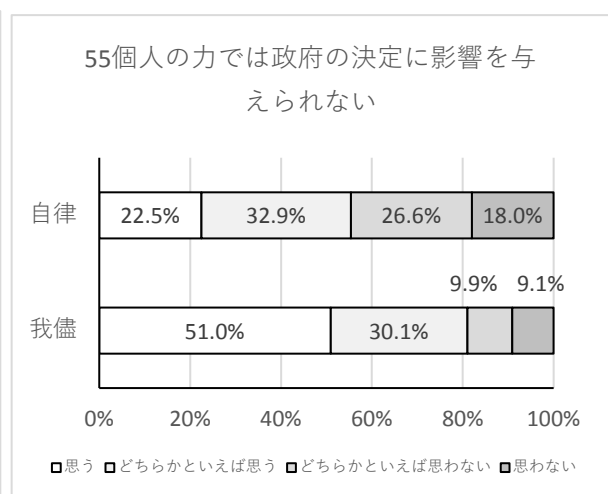
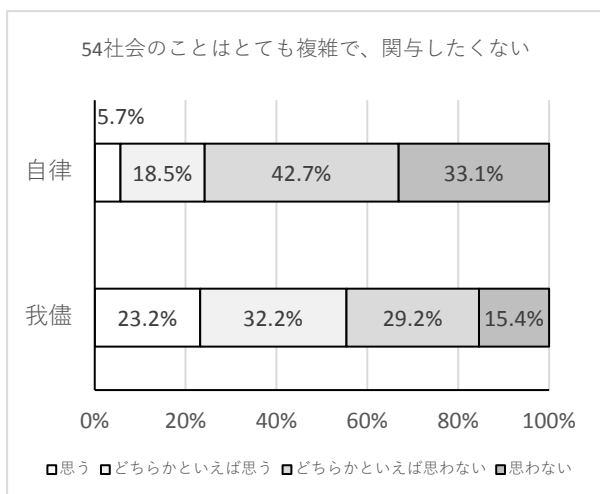
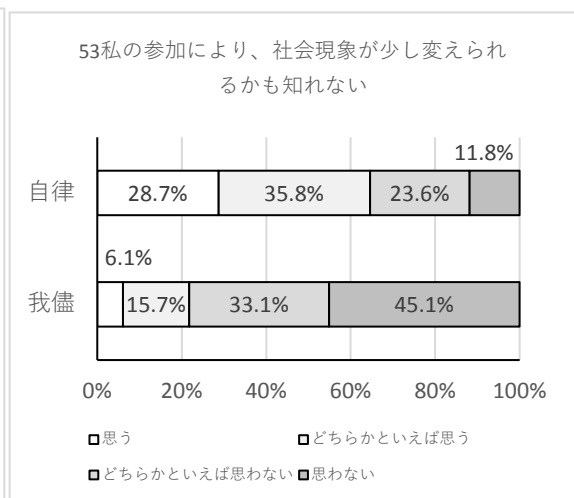
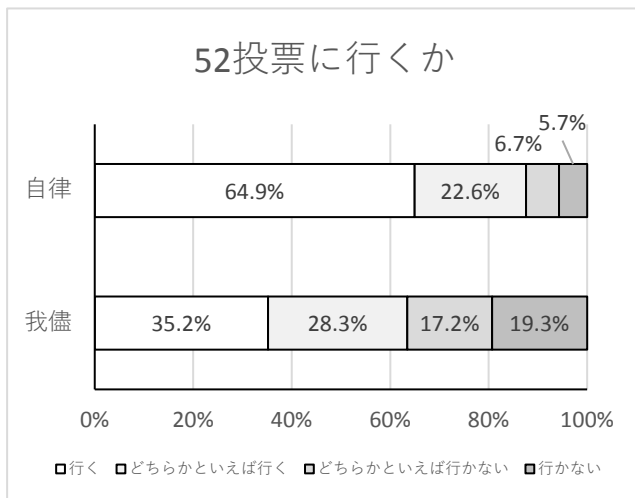


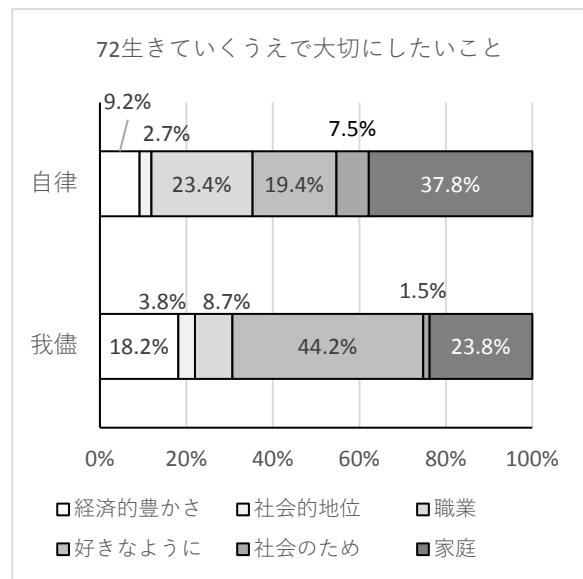
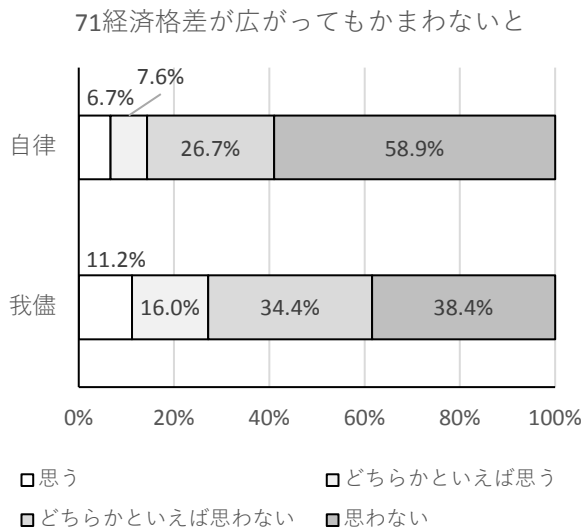




## エ) 社会参加意識

投票や社会参加の意欲では、両群の差はかなり大きく、3つの指標の中でもっとも明かな結果となっている。経済格差、生きていくうえで大切なことも、それぞれの考え方の特徴がはっきり現れている。





### (6) 第一部分分析のまとめ

前回調査から15年が経過して、これまで使用もしくは開発してきた尺度が有効かどうか危惧されたが、大きな変動はなく、3つの基準尺度をほぼそのまま分析に活用することができた。

自己評価尺度については、長年、さまざまな分析で使われてきたところでもあり、現在でも通用することが確かめられた。ただこれまでの調査で示されていた「自己価値観」と「自己有能感」の2因子構造は今回の調査ではあいまいになっており、自己評価尺度そのものの今後の研究が待たれる。

「行動決定の基準：道徳原理と快樂原理」尺度については、両群の傾向はおおむね自己評価と同様の傾向を示しているが、経済格差や生きていく上で大切にしたいことでは、自己評価では見えなかった差が見えている。

「自他関係の傾向：自律と我儘（わがまま）」尺度については、他の尺度以上に敏感に学校生活や社会参加の意識の違いを反映している。「自律」と「わがまま」の違いがわずかに8問（使用するのは7問）への回答によって示唆されるので、独自の指標となる可能性を持つといえる。

新科目「公共」は、「公共空間に主体的に生き他者と協働するための資質・能力の育成」を求めている。「主体的に生き」たり「他者と協働」したりすることは、そういう行動傾向を持っている生徒にとっては、情報や機会を与えることでよりよく育成されるかもしれない。しかし、「自己評価」が低かったり、「快樂原則」で判断・行動する傾向が強かったり、自他関係を好まなかったりする生徒を対象に、「資質・能力を育成」する方法を開発していくことは容易ではないし、一見うまく行っているように見えて、もともと「自己評価」が高かったり「道徳原則」や「自律」的な生徒が反応しているだけ、という可能性もある。公民科教育において教師が生徒の「行動決定の基準」や「自他関係の傾向」を理解して、生徒に自覚させることは、「資質・能力の育成」のために示唆するところが大きいと思われる。